

対世間関係から見た日本語の「世間的表現」について —「やっぱり」を例に—

甘 能 清

1. はじめに

日本国際交流基金の統計によると、海外の日本語学習者数が年々増えており、2015年12月現在、3,655,024人に達しているという¹。日本国内の非日本語母語話者の学習者も含めて計算すると、学習者数が更に増えると考えられる。これに併せて、非日本語母語話者を対象とする日本語教育に関する研究も大いになされてきている。言葉の意味に関する研究から、特定のコンテキストにおける話者の言語心理的な態度や話者の社会的対人行動意識など、いわゆる「言語慣習」に関する研究まで、幅広い分野でさまざまな成果が達成され、日本語教育の現場で大きな役割を果たしてきたと言える。しかしながら、意味論、語彙論、統語論（構文論）、語用論、敬語などの面に絡む日本語の難しさ以上に、「日本人の言語慣習」や「日本社会の言語慣習」から来る日本語の壁のほうを超えられにくいようである。多くの研究、または教育現場では、「日本語の壁」にかんする外国人日本語学習者の疑問に対して「日本人の言語慣習」や「日本社会の言語慣習」などの一言で済まされており、外国人日本語学習者の疑問に根本的に答えていない説明で終わってしまうケースが多々あるのは事実である。

「日本人の言語慣習」や「日本社会の言語慣習」に由来する日本語の難しさの例は少なくないが、紙幅などの制限により本稿では「やっぱり」²を例に議論を進めていきたい。

2. 「やっぱり」の難しさ

「やっぱり」は日本人の愛用語のひとつとして、これまでも多くの研究者の注目を集め、研究の課題となってきた。金田一(1992:195)は、「特に違った意見を持っていないということを力説している…自分の言うところは一般法則にあっている、その例外ではないという意味で愛用されるものであろう」と指摘している。言い換えれば、「やっぱり」の発話前提として、社会の通念や世間一般の常識がすでに存在しており、それと話者の判断や認識が一致している感覚があるという捉え方である(曹再京 2001:39)。

そして、森本（1988：31—32）は、「<やっぱり>とか<やはり>というこの慣用語は、じつは、その恐怖を無意識のうちに言い表しているものである。日本人が何かについての意見を聞かれたときに、やたらに<やっぱり>や<やはり>を連発するのは、<私が思っていた通り>という予言者的な、つまり、自信に満ち溢れた立場の表明ではなく、<あなたをはじめ、みんながそう思っているように><世間一般の人たちが考えているように>自分もそう思う、という意味の<やっぱり>」なのだ」と指摘した上で、「私はこの言葉こそ、日本語の主語だと思う。<自分はこう思う>というときの主語は、むろん、その意見を発表する<自分>である。だが、<やっぱり>とか<やはり>という間投詞をさしはさむときには、<自分>という主語のほかにもうひとつ、<日本>という、あるいは<世間>という大主語が無意識のうちに予想され、前提されているのだ」という見解を示している。

このような「やっぱり」の意味用法を追求したものに対し、「やっぱり」の機能的な面を重視したものが、西原（1988）と蓮沼（1998）である。西原は「やっぱり」の機能を「話し手の日常的な推論体系」として捉え、命題・文脈・談話の各領域において「予め持っている自身の信条を主張している」のが「やっぱり」であるとしている。また、蓮沼（1998）は、「やっぱり」の機能を、「前提命題と当該命題の適合の再認識・確認」とであると述べる（曹 2001：39）。

川口（1993）などでは、「やっぱり」の前提には一般に「社会通念・世間一般の常識」「話者の主観」「客観的状况」、この三つがあるとされている（曹 2001：39）。

また、芳賀（2004：91）は、「個性」重視のはずの現代でも、街頭でマイクを向けられた日本人は、「そうですね、私もやっぱりこの問題は…」と、自分の意見も他者から突出はしていない、と印象付ける前置きを忘れない、と指摘している。

このように見てくると、「やっぱり」が機能するためには、「社会通念」や「世間一般の常識」といった前提が存在していることがわかる。しかし、「社会通念」や「世間」「世間一般」とは一体何なのか、日本語母語話者には暗黙の了解があり自明なことかもしれないが、日本語学習者には難解である。「やっぱり」の難解さは、その意味的用法より、話者の頭に潜んだ「世間」意識が把握できないところにこそあると考えられる。

3. 「世間」とは

「世間」と「社会」は意味的に近く、どちらも「人々の集まり」を指すため、この二つの言葉は、日本語学習者にとって特に混同しやすい言葉である。日本語学習者のほとんどが、両方とも「人々の集まりとしての“シャカイ”」に理解してしまうのではないかと考えられる。しかし、「世間」と「社会」とは明らかに違ったものである。これは、柳父（2013：2）³にある次のような一節からも分かる。

明治十九年（一八六八）に書かれた、二葉亭四迷の『浮雲』に、「社会」と「世間」ということばが、

わずかに使われている。それぞれ次のような用例である。

…お役人様、今のいわゆる官員さま、後の世になれば社会の公僕とか名乗るべき方々

…まず世間の娘っ子をごらんなさい。

つまり、「社会の公僕」、「世間の娘っ子」である。「社会」と「世間」ということばは、よく似ている。どちらも、多数のひとびとの集合体を指している。この例もそうである。ところが、この二つのことばには、また、微妙な、しかも決定的な違いもあるようである。「社会の公僕」とはいうが、「世間の公僕」とはまず言わないだろう。「世間の娘っ子」はふつうの表現だが、「社会の娘っ子」とは、絶対に言わない。明示十九年以来、今日でもそうである。

「世間」と「社会」は違っている。「社会」は明治10年ごろに、Societyという言葉の訳語として生まれたもので、日本語固有の言葉ではないため、日本語学習者が理解しやすい存在である。そのため、日本語母語話者とのズレが少ない。それに対して、「世間」は日本語学習者にはその意味合いが理解しがたい言葉である。

『広辞苑』⁴を引いてみると、次のような定義があげられている。

1 (仏) イ——有情の生活する境界。衆生世間。…⁵

ロ——有漏法の異称。…

2 天地の間。あたり一帯。…

3 人の世。人生。…

4 世の中の人々。同じ社会を形成する人々。…

5 暮らし向き。身代。財産。

つまり、辞書的には、「世間」は生活の場であり、生活している人々であり、その人たちの暮らし向きを意味していると考えられる。『広辞苑』以外のいくつかの書肆発行の辞典でも、「人々の集まり、生活の場、交わりの範囲、生活の手段、身代」などを意味する言葉とされている(中村2011:4)。

けれども、辞書の説明だけでは、「社会」と異なった「世間」の意味合いが分からないままである。日本語では、「世間の目」、「世間の声」、「世間の決まり」、「世間並み」、「世間体」、「世間では」などの言い回しが出ている。一見、世論の意味があつたり、世の中での規律や標準とか常識や道德のような意味が含まれたり、世の中一般の意味が読み取れたりする(中村2011:3—4)。しかし、特に「世間」が用いられる場合、単に世論や常識、また社会や人々の集まりなどの意味にとどまらないことが多い。そこになんらかの特別な意味合いが働いていると考えられる。それはほかでもなく、日本語母語話者が「世間」に対して抱く心理的・社会的な準拠集団意識であり、日本人の「対世間意識」であるといえよう。

3.1 日本人の「世間意識」

1970年代後半から今日にかけて、「世間」に人々の注目が集まり、それに対する研究も広くなされてきた。1970年代の柳父章、井上忠司をはじめ、阿部謹也、佐藤直樹、鴻上尚史、中村陽吉などの研究者による「世間」の研究では、さまざまな成果が発表されている。そこでは、以下のような考え方が広く認められている。

第一に、日本人は「社会」ではなく、「世間」に生きている。「世間」は日本古来のものであり、「社会」は明治10年ごろに、Societyという言葉が「社会」と訳されてはじめて成立したものである。「世間」と「社会」との違いは、以下の表1のようにまとめることができる（鴻上2009：42—43、阿部1999：9、井上2007：50など）。

表1：「世間」と「社会」の比較

世 間	社 会
贈与・互酬の関係	契約関係
長幼の序	個人の平等
共通の時間意識を持つ	個々の時間意識を持つ
個人の不在	個人の集合体
変革は不可能	変革が可能
集団主義	個人主義
非合理的・呪術的な関係	合理的な関係
聖／俗の融合	聖／俗の分離
儀式性の重視	実質性の重視
排他性（ウチ／ソトの区別）	平等性
権力性	非権力性

第二に、「世間」は、個人（行為主体）の側から見れば、日本人に特有な、一種の「準拠集団」である（井上2007：98）。「世間」は、一種の準拠集団であって、同心円的に重層化した構造をなしている。すなわち、自分の側から言えば、一番内側の近い存在が「ミウチ」または「ナカマウチ」であり、一番外側の遠い存在は、「アカノタニン」または「ヨソノヒト」である。両者の中間帯にあって、「世間体」にこだわるなど、人びとの行動のよりどころとなるのが「世間」である。しかし、どこからを「世間」と呼び、どこまでを「世間」と呼ぶか、そのテリトリーを規定するのは、客観的に存在する規準ではない。「世間」はあくまで主観的なものであり、状況に応じて伸縮自在、かつダイナミックな概念なのである（井上2007：266）。

第三に、日本人は、おおむね、「世間」の基準に照らして恥ずかしくない言動をとることを意識して生きている。唯一絶対神（超越者）を持たない日本人は、「世間の目」から見られた時の自分を恥じるという、極めて状況的な倫理を内面に培ってきた。普遍的な価値基準を持たなかったので、「世間」の基準から自分だけが逸脱することのないように、「世間」と自分との間に生じるズレを、絶えず微調整しながら生きてきたのである。それが「世間並み」に生きるということにほかならな

い (井上 2007 : 235)。

第四に、「世間」ではいくつかの原理またはルールが働いている。少なくとも、①「贈与・互酬の意識」のルール、②「長幼の序という身分意識」のルール、③「共通の時間意識」のルール、④「差別的排他的意識」のルール、⑤「神秘性・呪術性」のルールなどが考えられている。①から③までが「世間」の根本原理であり、④と⑤は、それらの原理の結果として生じる特徴というふうと考えられる。もちろん、この五つという数字は絶対のものではなく、より多くの特徴を考えることも可能である (鴻上 2009 : 79—80)。

「世間」に関する考え方や観点はほかにもあるが、本稿と関わりがあると思われるものは、主に上述したものであろう。まとめてみれば、日本人は「社会」ではなく、「世間」に生きているのである。そして、日々「世間の目」を気にしながら、「世間外れ」にされないように、「世間並み」に生きているのである。これが「世間」が日本人に対して持っている心理的社会的機能である。言語運用の視点から見れば、これが「世間」に生きる日本語母語話者特有の「世間意識」である。日本語による言語行動において、日本語母語話者は日本語学習者と比べ、明らかに「世間並み」に、「世間外れ」にされないような「対世間関係」を心がけている。

3.2 日本語母語話者の「対世間関係」意識

土居 (1971) によれば、日本人にとって、ウチとソトの生活空間は、三つの同心円からなっているという。その際、ウチとソトを区別する目安は、「あまえ」に基づく「遠慮」の有無であった。本来、「遠慮」は「遠く慮る (おもんばかり)」という意味で使われたが、今日ではもっぱら、人間関係の親密度を示す表現として使われている。すなわち、親子の間には遠慮がないが、それは、親子が他人ではなく、その関係が「あまえ」に基づいているからである。親子以外の人間関係においては、親しみを増すにつれて、遠慮が減り、疎遠であるほど遠慮は増してゆく (井上 2007 : 123)。

井上 (2007) では、土居健郎 (1971) の考えに基づき、遠慮が働く人間関係を中間帯とし、「そのウチ側に、遠慮がないミウチの世界があり、そのソト側に、遠慮を働かす必要のないタニンの世界が位置することになる」とされている。一番ウチ側の世界と、一番ソトの世界は、無遠慮であるという点で共通している。すなわち、ミウチの世界は、甘えが支配していて隔てがないので無遠慮であり、タニンの世界は、隔てはあっても、それを意識する必要がないので、無遠慮なのである。ミウチの間では、「ミウチの恥にふた」をすることができ、タニンの前では「旅の恥はかき捨て」でもよいのであって、ミウチの世界とタニンの世界はともに、「世間体」を繕う必要がない世界である。「世間体」を繕わなければならないのはその中間帯の「世間」である。図で示せば、図 1⁶の通りである。

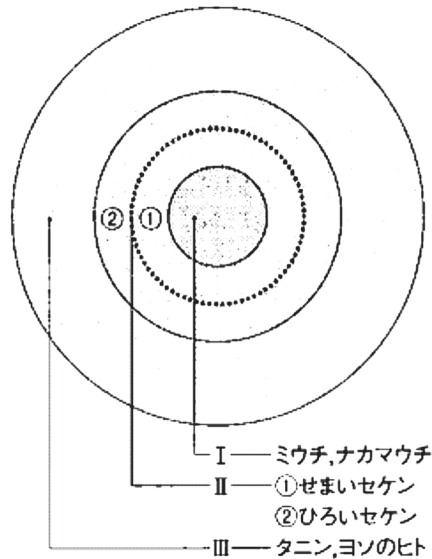


図1 配慮・遠慮を必要とする「世間」

ウチの集団とソトの集団との関係は、これまでも触れてきたように、同心円的に重層化した構造をなしている。ウチに対してソトであった集団が、実は、さらにソトの集団に対してはウチの集団となる。このような構造の理論的帰結として、必ずや、これ以下は「ウチ」としか言えないような小さな集団の単位と、それ以上は「ソト」としか言えないような大きな集団の単位が残るはずである。前者の観念の総称が「ミウチ」ないしは「ナカマウチ」であり、後者の観念の総称はおそらく「タニン」ないしは「ヨソのヒト」である。そして、その中間帯の世界こそが、日本人が日常生活で遠慮または配慮を必要とする「セケン」（狭いセケンと広いセケン）である。言い換えれば、この「世間」に生きている日本人は、言語行動において、対人関係よりも「対世間関係」をより意識している。つまり、日本人は、「世間並み」に発話し、「世間はずれ」や「仲間はずれ」にされないようにいつも言葉遣いに心がけているのである（井上 2007：124）。

井上（2007）の考え方を踏まえるならば、日本語母語話者にとっては、「世間」は「社会」よりずっと心理的な、自己の主観と深く関わりあう存在である。早くから、日本では、「個人対社会」ではなく、「自分対世間」だというスキームを強調していた学者もいる（芳賀 2004：88）。こうした「自分対世間」から来る「対世間関係」の意識があるゆえに、日本語には罵り言葉など、配慮・遠慮のない、「世間外れ」の表現が少ない一方、思いやりを込めた配慮表現などの「世間的表現」がかなり発達している。日本語には、日本語母語話者が「対世間関係」の意識を持っていることに由来する表現がかなりあり、その点は日本語学習者が気づきにくい点である。

4. 対世間関係から「世間的表現」へ

周知のように、日本語には位相語があり、相手との関係が決まらなると発言できない言語であると言われている。これは日本語研究において広く認められている事実である。相手が年上か年下か、うんと偉いのか普通なのか、等々によって、呼び方や話し方などが違って来る。「山田」と呼ぶのか、「山田先生」と呼ぶのか、「君」と呼ぶのか、「あなた」と呼ぶのか、また、「する」と言うのか、「します」というのか、とさまざまであるため、具体的な場面によって言葉遣いが違って来る。言わば、日本語は「世間」と共に生きている言語なのである（鴻上 2009：226）。

中川（2013：188）は、「将来／未来」のような日本語における類義語の相違を説明するのに、「世間」に関する阿部氏の言葉をこう引用している。

家庭の中で親が子供に「日本の社会では…」と話すことはそう多くはないだろう。しかし、「そんなことでは世間には通用しないよ」などということはしばしばあるだろう。「わたる世間に鬼はなし」とか「世間の口に戸は立てられぬ」などの諺を知らない人もいない。日常会話の中では、「世間」という言葉は今でも十分に生きているのである。それどころか私達は世間という枠組みの中で生きているのであって、誰もが世間を常に意識しながら生きているのであろう。（一四頁）

多くの日本人にとっては人類という概念は遠いものにすぎず、「私たち人類は皆兄弟」という科白もあまり実感をもって受け止められない。日常生活の次元では、実感をもって仲間と考えているのは自分の世間の中の人だけだからである。（一七頁）

中川（2013）はこの引用に説明を加えた上で、「世間」という語を借りて、「将来」のような語を「世間」語と呼び、「未来」のような語を「世界」語と呼び分けている。

中川（2013）における世間語の定義と分け方に関しては、第三者から疑問が提示される可能性があるが、日本語を世間語と世界語に分けるのはきわめて有意義な示唆である。中川（2013）の観点によれば、世間語とは「世間」の領域における物事などを表す言葉のことであり、世界語とは「世界」の領域における物事を表す言葉のことでありと理解できる。このような世間語と世界語の位置づけについては、更に議論の余地があろう。

日本語母語話者、つまり日本人は、対世間関係意識に基づき、日本語を使っている。対世間関係意識の有無によって言葉遣いが大いに変わってくるケースが少なくない。鴻上（2009：234—235）は、次のように指摘している。

私たち日本人は、「世間」で流通する言葉に本音を乗せ、「社会」で流通する言葉に建前だけを乗せてきました。すると、どうなるかということ、本音をしゃべる時は、「世間」で流通する言葉中心になってしまうのです。電車の中で、騒いでいる人たちに向かって、苛立ちが高じると、「うるさい」とか「静

かにしろ」という言葉が出てくる人が多くなります。これは、「本音の言葉」、「世間」の言葉です。ですが、こういう時こそ、「です・ます」が必要なのです。それは、ニュアンスをむき出しにしないで、相手と交渉する方法なのです。「すみません、静かにしてください」と穏やかに言うことが、相手と交渉するためには重要なのです。

本音・建前のあり方に関する鴻上の考えが妥当かどうかは別として、鴻上が指摘したケースは、日本語には対世間関係の意識がよく働いていることを象徴的に表現している。しかし、言葉の運用をめぐって「世間」の範囲に関する議論や定義がないまま、「世間の言葉」とか「社会の言葉」などと決めてしまうのは危険であろう。本稿では、これまでの考察を踏まえて、仮に、日本の「世間」に生きる日本語母語話者が、ミウチでもタニンでもない「世間」において、対人関係より対世間関係を意識した上で発する表現のことを「世間的表現」と呼ぶことにしよう。日本語には「世間的表現」が少なくない。「いつもお世話になります」や「よろしく申し上げます」などの挨拶の言葉から、本稿が議論の例とする「やっぱり」などの「言表態度」⁷の言葉まで、「世間的表現」はかなり存在している。以下では、日本語母語話者と日本語学習者との意識の差という視点から、「世間的表現」としての「やっぱり」を分析することにした。

5. 「やっぱり」における「対世間関係」意識

中村（2011）では、心理学のアプローチで「私」（行為主体）と「世間」との心理的・社会的交流の仕方が考察されている。それによると、「私」は、心の底にいる自分の代弁者である「自己」を通して、「世間」の代弁者である「他者」を経て、「世間」との交流を行っているという。図2で示せば、次のとおりである。

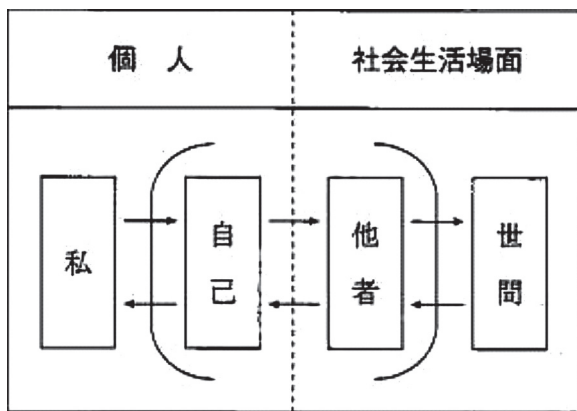


図2 「私」と「世間」との心理・社会的交流（中村 2011：52）

中村(2011)の考え方に基づけば、世間に生きる話し手の「私」は「世間」を意識した上で発話した場合、聞き手を「世間」の代弁者としての「他者」と見なし、対人関係より対世間関係の意識を働かせると考えられる。本稿では、このような対世間関係の意識の存在を表すような表現が「世間的表現」とであると位置づけてきた。先行研究で明らかにされたように、「世間」「世間一般」の存在を意識することが「やっぱり」の前提となる。したがって、「やっぱり」は「世間的表現」に属し、話し手が対世間関係を意識した上で使ったものであると考えられる。日本語学習者にはこのような対世間関係の意識が培われていないため、「やっぱり」への理解が難しくなるわけである。「やっぱり」の前提となる「世間」「世間一般」を理解するには、「世間から対象となる人々への心理・社会的機能」、つまり「世間並みに」発話し、「世間はずれ」にされないように言語行動を心がけているという話者の心的態度を理解しておかなければならない。

金田一(1962:195)はこう述べている。

雑誌『相撲』のインタビューを見たら、前田川という力士は、問の半数に対して答えを「やっぱり」ではじめていた。

○ 好きな女性のタイプは？

前田川：やっぱり、おしとやかな、着物のよく似合う人がいいね。純日本的な女性だな。あんまりパリパリしたのはこっちがこわいよ。

これはインタビューにおける会話であるため、後に「世間」に公表されるのが普通であろう。つまり、インタビューに来た記者が発する問いは、記者そのものの問いであるのみならず、「世間」の代弁者としての記者の問いでもある。それが一つの要因で、話し手の「前田川」には明らかに「対世間」意識が働いているわけである。ここでの「やっぱり」は、「世間並みに考えているから、まさか世間外れにされることなどはないだろう」という話し手の「私」の心理を表している。モダリティーの観点から言えば、この「やっぱり」は「言表態度」のもので、話し手の「私」の対世間関係、対世間意識を表している。

もう一つの例を見ていこう。

○「星が出ているから、やっぱり明日もいい天気だろう。」

なぜ「やっぱり」になるのか、「きっと、かならず」などに言い換えてはならないのか。モダリティーの視点から見れば、「きっと／かならず明日もいい天気だろう」といっても、「言表事実」そのものには変わりはない。変わるのは「言表態度」である。すなわち、「やっぱり」を使って、「自分の考え方はみんなの考え方と同じであり、世間並みのものであり、世間外れの恐れはないだろう」という心的態度を織り込ませようとしているのである。「やっぱり」が使用される場合、やはり対世間関係、対世間意識という心的態度に重きが置かれているのである。この点に十分な注意を払わないと、「やっぱり」への日本語学習者の理解は十分なものにはならないのではないだろうか。

6. 終わりに

本稿では、日本の世間、日本人の世間意識、日本語母語話者の対世間関係の意識から日本語学習者に難しいと思われる日本語の「世間的表現」を考察してきた。日本語母語話者特有の対世間関係の意識を理解しないと、日本語に数多く存在している世間的表現は理解しがたくなる。「やっぱり」はこの類の表現であり、それが難解なのは、やはり前提となる日本人の「世間」意識、日本語母語話者の「対世間関係」の意識にあると考えられる。

「世間」または「世間学」の視点から日本語または日本語教育を議論するものがあまり見られない今日では、本稿の試みはやや冒険的な試みかもしれない。けれども、本稿が示唆したように、一見衰えていそうな「世間」が依然として存在していて日本語母語話者の表現に影響を与え続けている現実を考えれば、このような議論はやはり必要なのではあるまいか。また、本稿にはまだ今後の研究に期待する課題が少なくない。例えば、「世間」は日本独特のものなのか、「世間」はどのように変わっているのか、「世間的表現」はどのレベルまでどのように日本語に散在しているのか、等々。これらの課題は、いずれも今後の研究課題にさせていただきたい。

* 本稿は、日本学術振興会（JSPS）より助成をいただいた研究課題「文化的安全保障に基づく〈世間体〉の研究」の研究成果の一部である。

注

- ¹ 国際交流基金（2017）「海外の日本語教育の現状と課題」、http://www.nkg.or.jp/wp/wp-content/uploads/2017/06/20170615_JF.pdf、アクセス期日：2017年10月6日
- ² 「やはり」、「やっぱ」、「やっぱし」などの形を含む。
- ³ 1978年7月、初版第1刷発行。2013年5月、改装版第1刷発行。
- ⁴ 新村出編、1976年（第2版補訂版）、岩波書店。
- ⁵ 用例、事例の部分は省かせてもらう。下記に同じ。
- ⁶ 井上（2007：124）に基づいて作成したものである。
- ⁷ 森野（2004：144）今日の日本語文法の研究では、文を「客体的な事柄—事態を表す」部分と、「それに対する表現主体の捉え方や伝達のあり方といった心的態度を表す」部分とに分ける理解が、主流になっている。前者は「命題」「言表事態」、後者は「モダリティ」「言表態度」などと呼ばれることが多く、モダリティが命題を包み込む形で文は成立するとされる。

参考文献

- 阿部謹也 1995 『〈世間〉とは何か』、講談社。
- 阿部謹也 1999 『日本社会で生きるということ』、朝日新聞社。
- 阿部謹也 2005 『〈世間〉への旅—西洋中世から日本社会へ』、筑摩書房。
- 井上忠司 2007 『〈世間体〉の構造—社会心理史への試み』、講談社。
- 佐藤直樹 2001 『〈世間〉の現象学』、青弓社。
- 川口良 1993 「日本人及び日本語学習者による副詞〈やっぱり〉の語用論的前提の習得について」『日本語教

- 育』81、pp116-127。
- 金田一春彦 1962 『日本語の生理と心理』、至文堂。
- 鴻上尚史 2009 『<空気>と<世間>』、講談社。
- 呉曉莉 2008 「日語副詞的語義与社会規約」『長沙鉄道学院学報(社会科学版)』9-3、pp201-203
- 曹再京 2001 「順接と逆説の論理から見た<やっぱり>の機能について」『言語科学論集』5、pp37-48
- 土居健郎著 1971 『<甘え>の構造』、弘文堂。
- 中川正之 2013 『漢語から見える世界と世間』、岩波書店。
- 中村陽吉 2011 『世間心理学—ことはじめ』、東京大学出版社。
- 西原鈴子 1988 「話者の前提—<やはり(やっぱり)>の場合—」『日本語学』7-3、pp89-99。
- 芳賀綏 2004 『日本人らしさの構造：言語文化論講義』、大修館書店。
- 蓮沼昭子 1998 「副詞<やはり・やっぱり>をめぐる」『ことばから人間を』、昭和堂。
- 森野崇 2004 「モダリティ」をめぐる諸問題」『国文学研究』142、pp144-135。
- 森本哲郎 1988 『日本語表と裏』、新潮社。
- 柳父章 2013 『翻訳文化を考える』、法政大学出版局。